中学校部会

自分の思いを語るしおさいの生徒たち

～あたたかな人間関係を土台に思いを大切にする道徳の授業づくりを通して～

三河地区　西尾市立一色中学校　廣瀬　陽平

１　主題設定の理由

本校では、西尾市教育委員会研究委嘱を受け、「自分の思いを語るしおさいの生徒たち～あたたかな人間関係を土台に思いを大切にする授業づくりを通して～」を研究主題として研究を進めた。本研究における「思い」とは、単なる感想や意見ではなく、自らの経験や知識と結び付いて形成された考えであり、他者に伝えたいという意志を伴うものである。また、「語る」とは、自分の考えを表現するだけではなく、仲間の考えと出会い、自らの考えを見直したり深めたりする営みを含むものと捉えている。

近年、生徒を取り巻く社会環境は大きく変化している。SNS やインターネットの普及により、生徒は多様な価値観や情報に触れる機会を得ている。一方で、他者との関わりが希薄になったり、自分の思いを率直に表現することに不安を抱いたりする生徒も少なくない。学級生活においても、「間違えたらどうしよう」「否定されたら嫌だ」という思いから、自ら発言することをためらう姿が見られる。本学級の生徒も、日常会話やペア活動には積極的に参加できるものの、自分の考えの根拠を説明したり、仲間の意見を受けて考えを再構築したりすることには課題が見られた。また、人間関係においても、自分の本音を伝えるより周囲との協調を優先する傾向が見られた。こうした実態は、道徳科の学習においても同様である。道徳科では、多面的・多角的に考えながら自己の生き方について考えを深めることが求められる。しかし、自分の考えを十分に表現できなければ、多様な価値観との出会いや自らの価値観の更新は生まれにくい。そこで、本校研究の成果を道徳科の授業に生かし、生徒が安心して自分の思いを語れる授業づくりに取り組むこととした。

そこで本実践では、「本当の友情とは何か」という問いを中心に据え、生徒同士の対話を通して考えを深める授業を構想した。そして、「追究意欲を高める課題づくり」と「教科の学びを支える意図的な教師支援」が、生徒の思いを語る姿につながるかを検証することとした。そのために、「『解決したい、分かりたい』という追究意欲を高め、教科の学びを支える意図的な教師支援を実践すれば、自分の思いを語る生徒が育つだろう」という仮説をたて、実践していくことにした。

上記を踏まえ、研究主題を「自分の思いを語るしおさいの生徒たち～あたたかな人間関係を土台に思いを大切にする道徳の授業づくりを通して～」とした。

２　研究の構想

（１）　目指す生徒像

本研究では、「自分の思いを語る生徒」を目指す生徒像として設定した。ここでいう「語る」とは単に発言することではない。自分の考えをもつ、根拠をもって説明する、相手の考えを受け止める、自分の考えを見直す、新たな考えを形成するという一連の学びの過程を含んでいる。道徳科においては唯一の正解を求めるのではなく、多様な価値観に触れながら自己の生き方を考えることが大切である。そのため、生徒一人一人が自分の思いを安心して表現できる環境づくりが必要であると考えた。

（２）　研究の仮説と手だて

仮説

生徒が「考えてみたい」「話し合いたい」と感じる問いを設定するとともに、教師が意図的な支援を行えば、生徒は自分の思いを語りながら多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めることができるであろう。

手だて

① 追究意欲を高める課題づくり

生徒から出された疑問や感想を基に学習課題を設定し、教師が一方的に課題を提示するのではなく、生徒の問いを出発点とすることで、「自分たちの課題」として捉えられるようにする。また、生徒たちが話し合いやすい発問の構図である二項対立の形式の主発問を設定する。

② 思考を深めるための意図的な教師支援

生徒の思考を促進するため、ア：構造的板書、イ：切り返し発問、ウ：対話活動、エ：役割演技を行う。生徒の発言を価値付けながら別の視点を提示し、多面的・多角的に考えられるような切り返し発問を設定する。

（３）　研究構想図



図の解説として、本研究では「あたたかな人間関係」を土台とし、その上に「追究意欲を高める課題づくり」と「意図的な教師支援」を位置付けた。これらの手だてによって、生徒同士の対話が活性化し、自分の思いを語る活動が充実する。その結果、自己理解や他者理解が深まり、よりよく生きようとする態度の育成につながると考えた。

３　研究の実際

（１）　授業前の実態把握

授業実施前に、教材を読む時間を確保し、初発の感想を書く時間を取り、生徒へアンケートを行った。その結果、「友達は大切である」と答えた生徒は多かった一方、「本音を伝えられる友達がいる」 「友達に嫌なことを伝えられる」という項目については肯定的回答が低かった。また、「友達のためなら自分が我慢してもよい」と考える生徒も一定数見られた。このことから、生徒は友情を大切なものとして認識しているものの、友情の本質については十分に考えられていない実態があると考えた。

（２）　教材分析

本教材「泣いた赤おに」は、多くの生徒が小学校中学年で学んだ教材である。人間と仲良くなりたい赤おには、友達の青おにが提案してくれた、「人間の家で暴れる青おにを、赤おにが懲らしめる」という計画を実行する。計画は成功し、赤おには人間と仲良くなった。一方で青おには、赤おにと人間の仲を大切にして欲しいと思い、姿を消し遠くに去る。しばらく経って、青おにの家の前に立てられた張り紙を読み、それを知った赤おには涙を流す。「赤おにのために行動する青おにの姿」や「青おにからの張り紙を読んで涙を流す赤おにの気持ち」を通して「本当の友情」とはどのようなものか考えを深め、心からの友人関係を築いていこうとする実践意欲と態度を育むことに適した教材である。

真の友情とは、相互に変わらない信頼があって成り立つものであり、その根底には、相手の人間的な成長と幸せを願い、互いに励まし合い、高め合い、協力を惜しまないという平等で対等な関係がある。しかし、友達との関係に、時には悩み、友達であるからこそ意見がぶつかることもある。当事者同士の悩みや葛藤を乗り越えることで真の友情は培われていくものであると考えられる。これらのことを日々実感する生徒も多いと思われる。その点で、友情や信頼関係というものは、一方的な自己犠牲を強いるものでも、依存に陥らせるようなものでもなく、対等で、双方向的な関係性であることを捉えさせ、日々の生活の中で他者との本当の友情や信頼関係を築いていこうとする実践意欲や態度を育みたい。

（３）　授業実践

指導過程　　※「◆」…　教科の学びを支えるための手だて

	学　習　活　動（生徒）	・教師支援　　【評価】
つかむ５	１　初発の物語の感想を交流する。 ・赤おにと青おには、本当に友達なのかな？ ・これって友情なのかな。 ・この後はどうなるんだろう。	・生徒の考えや思いから、課題を設定するためにメンチメーターを使用し視覚的にわかるようにする。

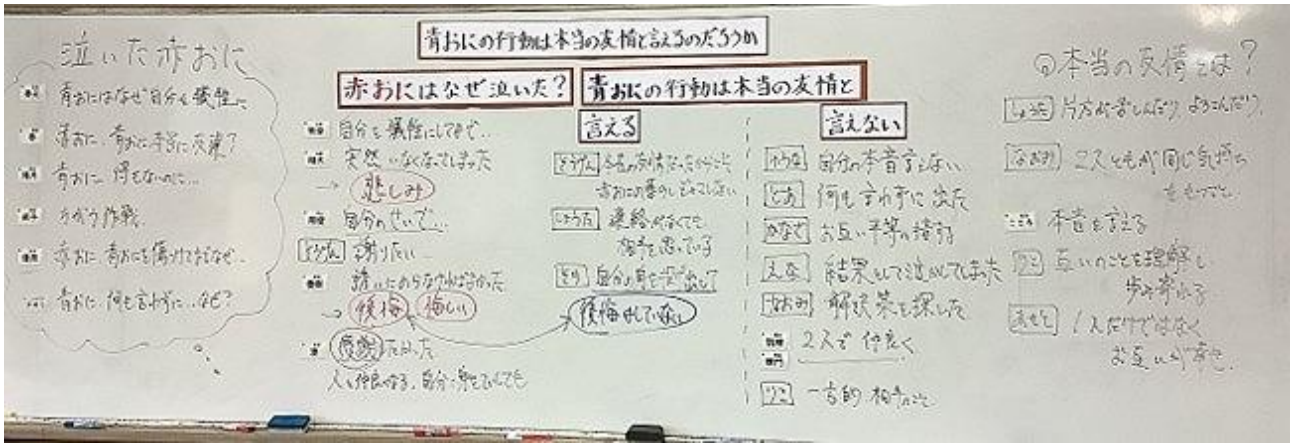
<table>
<tr><td>かかわる
40</td><td>2　赤おにの気持ちや青おにの行動から、道徳的価値について話し合う。
赤おには、なぜ泣いたのだろうか
＜赤おに＞
・よく考えずに行動した。
・身近な大切な存在に気付けなかった。
・自分勝手な事をしていた。
後悔や悲しみ
・自分のことを本当に考えている。自分を犠牲にしてでも、行動してくれた。
優しさや感謝
＜青おに＞
後悔はしていない。
青おにの行動は本当の友情と言えるのだろうか
【本当の友情だと言える】
・赤おにのためだけに、ここまで行動できる。
・赤おにのことを考えて、悪者になる覚悟ができているから。
・自分を犠牲にしてでも、赤おにのために行動している。
【本当の友情とは言えない】
・自分がいなくなることで、赤おにがどう思うかを考えられてなかった。
・青おにの行動は一方的で、自己満足ではないか。
・自分を犠牲にしても、赤おにが望んだ結果にはなってない。
＜役割演技＞場面：赤おにが青おにを探しに行き、会うことができた。
本当の友情と考える生徒：「青おに」
本当の友情と思えない生徒：『赤おに』
『どうしていなくなってしまったの？』
「きみが困っていたから、力になりたかったんだ」
『どうしてそこまで僕のことを思ってくれるの？』
「赤おにくんのことを信じているから」</td><td>・話し合いを活発にするために自由発言を取り入れる。
◆道徳的価値に迫るために、構造的な板書で、視覚的に思考を補助する。
◆友情が一方的なものではなく、対等で双方向的な関係にあると気付くために「青おにがしたことはよくなかったのか」「本当の友情とは、どういうものなのか」と切り返し発問をする。
◆他者との本当の友情や信頼関係を築くために、「物語はその後どうなったと思うか」という切り返し発問をする。また、場面設定をし、赤おに・青おにの役割演技を用いてそれぞれの心情を考える。</td></tr>
<tr><td>つなぐ
5</td><td>3　今日の授業で感じたことや考えたことを書く。
・今まで友達にとっての自分を考えたことはなかったが、互いに支えたり、相談できたりする関係でありたい。
・一方的に相手を思うのではなく、互いに支え合える関係が本当の友情だと思う。
・友情は自分にとって大切な人との関わりというだけでなく、相手にとっても自分が大切な存在であることが重要だということが分かった。
4　これまでの学級の写真のスライドを見る。</td><td>・本時の授業を通した振り返りを書くように指示する。
【「本当の友情」について、自分の考えをもつことができたか。（発言、ノート）】
・本時の学びを振り返り、自分に落とし込むために、本時の最後にスライドを見る時間を設ける。</td></tr>
</table>

本時を行う前に話し合いの時間を確保するために、前日の帰りの短学活で、物語を読んだ後に、登場人物の確認や、関係性を押さえた。また初発の感想や疑問に思ったことを書き、友情についての自分の考えをまとめた。また、事前に「友情」についてのアンケートを行い生徒の実態を把握した。本時では、◆初発の感想を共有し、メンチメーターを活用（資料１）することで、生徒の疑問や思いから学習課題「本当の友情とは、どういうものなのか」への追究意欲を高めた。



【資料１】初発の感想を共有したメンチメーター

次に、「赤おには、なぜ泣いたのだろう」と問うことで、「突然いなくなった悲しみ」「自分のせいでこうなってしまった後悔」「自分を犠牲にしてでも、人間と仲良くなる手伝いをしてくれたことへの感謝」を押さえることができた。続く、「青おにの行動は本当の友情だと言えるのだろうか」という問いでは、全体としては「言えない」という生徒が多く、「自分の本音を言えなかった」「結果として泣かしてしまった」「一方的に相手のことを考えていた」という発言が見られた。そこで「言える」と考えた生徒の発言「自分の身を投げ出してでも、赤おにのために行動したかった」を取り上げ、「青おにがしたことはよくなかったのか」と切り返したり、「青おには後悔をしていたのだろうか」と問い返したりすると、生徒の反応は停滞し、「青おには後悔していない、それだけ赤おにのことを思っている」という心情に目を向けることができた。また、◆構造的な板書（資料２）を意識することで、赤おにの気持ちや青おにの行動がもつ道徳的価値観の対比に目を向けて発言する生徒が増えた。その後、事前の生徒の疑問にあった「この後二人はどうなったのか」を引用し、◆役割演技（資料３）を取り入れた。



【資料２】赤おにと青おにのもつ道徳的価値を対比した構造的な板書

赤おにと青おにの立場に立ち、隣同士で交替しながら両方の気持ちを考え、その後全体の前で役割演技をする場を設けた。以下の赤おに役生徒と青おに役生徒の会話（資料４）のように、お互いの仲を再確認する形で終えることができた。この様子を受けて、「本当の友情とはどういうものか」の自分の考えをまとめるように全体に問いかけると、「本音を言い合える関係」「二人ともが同じ気持ちをもつこと」「互いのことを理解し、歩み寄れる関係」など、



【資料３】全体の前で行う役割演技

相互に作用し合う関係に目を向ける生徒が多かったことは、今後のよりよい友情や信頼関係の構築につながると感じた。

赤おに：「どうしていなくなってしまったの？」
青おに：「迷惑をかけたくなくて…。」
赤おに：「迷惑なわけない。君と一緒にいたいんだ。」
青おに：「でも一緒にいたら、君は青おにの仲間だと思われてしまう。」
赤おに：それでも、君と一緒にいたい。人間には僕からも説明するよ。」

【資料４】赤おに役生徒と青おに役生徒の役割演技での会話

４　研究の成果

（１）仮説に対する手立て①の検証

導入ではメンチメーターを活用し、生徒の感想や疑問を可視化した。生徒からは、「青おにはなぜ黙っていなくなったのか」「赤おには青おにを探さなかったのか」「これが本当の友情なのか」などの疑問が出された。その中から、「本当の友情とは何だろうか」を学習課題として設定することで、生徒たちの教材に対しての追究意欲に添った問いを設定することができたと考える。中心発問では、「青おにの行動は本当の友情だと言えるのか」と投げかけると、言える/言えないという構図を入り口に、自らの考えをもつ様子があり、どちらかの立場に立ち、自らの考えを仲間と共有するする姿が見られた。このことから仮説に対して手立て①は有効であったと考える。

（２）仮説に対する手立て②の検証

「青おにがしたことはよくなかったのか」「青おには後悔しているのか」という切り返し発問を行うことで生徒の考えに変容が見られた。青おにの行動面に考えが寄っていた生徒も、心情を考えたうえで、考えを再構築する姿が見られた。また、赤おにの気持ちや青おにの行動がもつ道徳的価値を構造的に板書することで、生徒の振り返りには、「友達のためなら何でもすることが友情だと思っていたけど違うと思った」「大切なのは本音を言い合えることだと思った」「自分も友達との関係を見直したい」という記述が多く見られ、「本当の友情とは、一方的に相手のことを考えるのではなく、互いに理解し歩み寄れる関係」など本時の課題に迫る発言や思考の変化が見られた。これは、多面的・多角的な思考を通して価値理解が深まったことを示している。また、普段あまり発言しない生徒が役割演技では積極的に参加する姿も見られた。生徒は登場人物になりきることで、教材文からは読み取れない心情にまで思考を広げていた。さらに、「本当の友情とは何か」という問いをあらかじめ書かせたことで、自らの考えの変化や、自分自身が影響を受けた仲間の考えを振り返りにまとめたり、自分の考えを準備したりすることで自信をもって、話し合いの活動に参加する生徒が多く見られた。以上から、仮説に対する手立て②は有効だったと言える。

５　今後の課題

本実践では、生徒の発言は活発になったが、発言内容の深まりには個人差が見られた。特に、自分自身の経験や生き方と結び付けて考える段階まで到達できなかった生徒も見られた。また、役割演技後に、生徒に本時の主題に立ち返って考えを聞いた。しかし、役割演技を見ていた生徒や行った生徒に対して、第三者としての視点を明確にして、「見ていてどうだった？」「やってみてどうだった？」と返すことで、より道徳的価値に近づく生徒が増えたのではないかという課題が残ったので、検証の余地があると考える。

今後は、書く活動との連携、振り返りの充実、ICT を活用した意見集約、学級活動や特別活動との関連を図りながら、より主体的に思考できる授業づくりを進めていきたい。また、今回の実践を単発の授業で終わらせるのではなく、年間を通した道徳科の学びの中で継続的に位置付け、「自分の思いを語る生徒」の育成を目指して研究を深めていきたい。